瀬戸内国際芸術祭 2013　沙弥島アートプロジェクト by 神戸芸術工科大学

SETOUCHI TRIENNALE 2013 SHAMIJIMA ART PROJECT BY KOBE DESIGN UNIVERSITY

佐久間　華　　大学院芸術工学研究科　助手
戸矢崎　満雄　先端芸術学部クラフト・美術学科　教授
藤本　修三　　先端芸術学部クラフト・美術学科　教授
藤山　哲朗　　デザイン学部環境・建築デザイン学科　准教授
林　健太郎　　先端芸術学部映像表現学科　実習助手
大畑　幸恵　　先端芸術学部クラフト・美術学科　実習助手

Hana SAKUMA　Graduate School of Arts and Design, Assistant
Mitsuo TOYAZAKI　Department of Crafts and Arts, School of Progressive Arts, Professor
Shuzo FUJIMOTO　Department of Crafts and Arts, School of Progressive Arts, Professor
Tetsuro FUJIYAMA　Department of Environment Design, School of Design, Associate Professor
Kentaro HAYASHI　Department of Image Arts, School of Progressive Arts, Assistant
Yukie OHATA　Department of Crafts and Arts, School of Progressive Arts, Assistant

要旨

本稿は、瀬戸内国際芸術祭 2013　春の部（2013 年 3 月 20 日[春分の日]～4 月 21 日[日]）の一環として参加した「沙弥島アートプロジェクト by 神戸芸術工科大学」で行われた全ての活動について、成果物の画像を交えながらその内容を述べたものである。成果物として挙げられるのは、次の 4 つ、①香川県坂出市沙弥島内 3 カ所（西ノ浜、ナカンダ浜、旧沙弥小中学校）を舞台にした本学の教員（助手・実習助手含む）6 名による作品展示・建築作品の公開、②準備期間中に行った地元の子供・親子を対象にしたワークショップ、③会期中に行った一般客及び地元住人を対象にしたイベント、④大学院の選択科目のひとつである大学院総合プロジェクト「沙弥島アートプロジェクト」において、担当教員の指導のもと、学生が行ったポスターや周辺地図などの印刷物およびスタッフ用パーカーなどのグッズ企画・制作である。

Summary

This report assesses all the activities carried out in 'Shamijima Art Project by Kobe Design University' which was held as a part of Setouchi Triennale 2013 Spring term (20th March and 21st April 2013), together with the images of the project outcomes. The following four types of work have been completed in the project; ① Works of art and architecture created by six teachers of KDU(including assistants and a research assistant) in three different venues (Nishinohama Beach, Nakandahama Beach and Fomer-Shami Elementary and Junior High School), ② Workshops for the local people held in the preparation period, ③ Events for both the local and general visitors during the Triennale period, and ④ Poster, map and other graphic design works and goods productions such as staff costume created by students under the supervision in the one of the Kobe Design University graduate school's optional subjects which is also called 'Shamijima Art Project'.

1. はじめに

1-1　芸術際概要

瀬戸内国際芸術祭（以下、芸術祭）は、瀬戸内海に点在する 12 の島と高松港・宇野港周辺を会場とした現代アートの祭典である。3 年おきに開催され、第 1 回目は、『瀬戸内国際芸術祭 2010:アートと海を巡る百日間の冒険』と題し､2010 年 7 月 19 日(海の日)から 10 月 31 日(日)の 105 日間開催された。第 2 回目である 2013 年度は、前回の「海の復権」、そして、「島の元気」に加え、『アートと島を巡る瀬戸内海の四季』をテーマに日本の四季のうつろいを感じることができるように開催期間を春（3 月 20 日［春分の日］～4 月 21 日［日］33 日間）、夏（7 月 20 日［土］～9 月 1 日［日］44 日間）、秋（10 月 5 日［土］～11 月 4 日［月・休］31 日間）の 3 シーズンに分けて行われることとなった。開催期間中には、現代美術の展示を始め、建築作品の公開、演劇・楽団などによるイベント、食、地元の伝統芸能・祭事と連携したイベントなどが各エリアで行われ、様々な角度から瀬戸内の民俗、芸能、祭、風土をより多角的に体感できるよう工夫が凝らされている。本学は、近隣地区の芸術大学として、春の部に参加した。本稿はその報告である。

本プロジェクト、沙弥島アートプロジェクト by 神戸芸術工科大学（以下、沙弥島アートプロジェクト）で行った主な活動は、次の 4 つである、①香川県坂出市沙弥島内 3 カ所（西ノ浜、ナカンダ浜、旧沙弥小中学校）を舞台にした本学の教員（助手・実習助手含む）6 名による作品展示・建築作品の公開、②準備期間中に行った地元の子供・親子を対象にしたワークショップ、③会期中に行った一般客及び地元住人を対象にしたイベント、④大学院の選択科目のひとつである大学院総合プロジェクト「沙弥島アートプロジェクト」において、担当教員の指導のもと、学生が行ったポスターや周辺地図などの印刷物およびスタッフ用パーカーなどのグッズ企画･制作である。これらは、準備から春の部終了までの間､瀬戸内国際芸術祭坂出市実行委員会（以下、実行委員会）、坂出市産業課にぎわい室（以下、にぎわい室）と連携と取りながら作業を進めた。

1-2　沙弥島概要

本プロジェクトの会場となった沙弥島は、新規に参加する中・西讃の島々のひとつであり、唯一、四国本島から陸続きの島である。沙弥島は、もともとは瀬戸内に浮かぶ塩飽諸島の小島であった。1967 年に工業地帯を形成する為に埋立てられ、坂出と陸続きになった。近くには、臨海埋立地を有効利用した番の州公園や香川県立東山魁夷せとうち美術館と瀬戸大橋記念公園などがある。また、島の歴史は古く、縄文時代から古墳時代の遺跡や製塩遺跡なども点在する。「万葉の島」としても知られ、万葉の歌人である柿本人麿が漂流し辿り着いた後、この島でみた光景をもとに歌を詠んだことでも知られる。

図 1　沙弥島アートマップ（6-2）拡大図　沙弥島周辺地図
制作：坂出市　デザイン：沙弥島アートプロジェクト

図 2　沙弥島アートマップ（6-2）拡大図　香川県高松空港・JR 高松駅からのアクセス図　画面左上の赤い部分が沙弥島

2. 沙弥島アートプロジェクトの概要

芸術祭全体のテーマとしては、すでに示したように「海の復権」、「島の元気」、「アートと島を巡る瀬戸内海の四季」が挙がっている。沙弥島アートプロジェクトでは、それらのテーマを念頭に置きながら、沙弥島固有の自然・生活・文化・風土にちなんだ作品づくりができるようにテーマを設定した。本プロジェクトテーマ「三つの白」は、「塩」「砂糖」「木綿」という異なる白で構成された古くからの「讃岐三白」、そして現在の坂出市名産「塩」「うどん粉」「たいら貝」に由来する。白で構成された地元の名産品をこのように総称することに着目し、これに現在的視点を加えて沙弥島固有のアートとして発信することとなった。

例えば、旧沙弥小中学校内に公開された 4 作品について少し触れると、戸矢崎満雄は、沙弥島の浜に打ち寄せられた白い発泡スチロール、佐久間華は、坂出の地元産業のひとつである塩、大畑幸恵は、瀬戸内で採集した貝を砕いてつくった絵具を作品の素材に選び、林健太郎は沙弥島に由縁のある柿本人麻呂の歌や塩をモチーフに映像作品を制作というように「三つの白」というテーマを上記の名産品だけに留めず、白色、海、塩田、貝殻や海岸に打ち上げられた廃材、沙弥島の歴史や由縁のある歴史上の人物などへとその解釈を広げた。また、旧学校という誰もが共有する懐かしさを感じる空間の特性を生かし、沙弥島という特定の場所の為に作られ、そこに展示することで成立する作品づくりというものを行った。各作品の詳細については 3-3~3-9 に述べる。

写真 1　本プロジェクトのメイン会場　旧沙弥小中学校

3. 作品について

3-1 沙弥小中学校内で展示された作品

本プロジェクトのメイン会場である旧沙弥小中学校は、西ノ浜とナカンダ浜の中間地点に位置し、沙弥島・北東と北西に群生する森林地帯を両脇にナカンダ浜側にコの字型に開くように配置されている。敷地内には、大教室、音楽室、資料室など 5 つの部屋からなる平屋建て鉄筋コンクリート造の校舎 1 棟と 2 つの部屋からなる小さな建物があり、ナカンダ浜側には、20 坪程の校庭がある。本プロジェクトの展示スペースとしては、図 3 で示すように 3 教室及び L 字型廊下を利用し、矢印順に戸矢崎①、佐久間②、大畑③、林④の作品を公開した。この他には、北東に位置する音楽室はカフェ（3-8）、その横の理科実験室はカフェ用キッチン、職員室はスタッフ用の部屋として利用し、図書室は旧学校の雰囲気を味わえるようにそのまま本を残しワークショップの作品 10 点（4-2）を展示、一般に公開した。

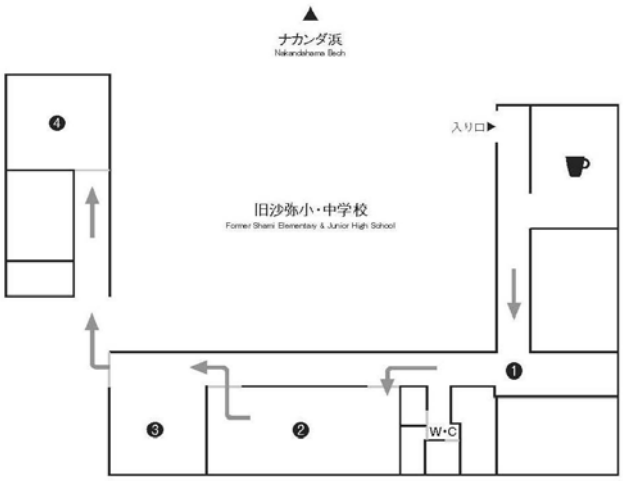

図 3　会場レイアウト

3-2　旧沙弥小中学校内作品制作の手順について

作品制作の手順としては、①にぎわい室の協力のもと、地場産業である製塩を行っている工場や鯉のぼり製作所の見学、作品の素材を入手する為に沙弥島周辺や海岸を探索するなど現地訪問を重ねた、②旧小中学校の見学・展示スペース実測・修繕・改装工事依頼、③それぞれの作品プラン及び本プロジェクトの企画書を仕上げ、実行委員会に提出し作品プランを確定、④にぎわい室の協力のもと、戸

矢崎・大畑の作品の素材を現地調達、⑤各自作品制作、必要に応じて現地作業、⑥会場づくりと搬入作業となる。全体を通して、実行委員会とにぎわい室と随時連絡を取りながら進行した。

特に、会場づくりと搬入作業については、いわゆる照明や展示壁面が完備されているギャラリーとは全く異なる空間を使用することもあり、展示計画は最大の課題であった。準備期間中、特に作品搬入前後には、「旧学校の雰囲気を残しつつ作品をどのように見せるか」について実行委員会側と話し合いを重ねた。主な対応策としては、①部屋の用途に順じて、建物内にあった家具・機材・備品を選別し必要に応じてそのまま設置または撤去、②佐久間・大畑の展示スペースの全てまたは一部の蛍光灯の取り外しおよび照明器具の設置、③佐久間・林の展示スペースを暗室にする、④大畑の展示スペースの床カーペット撤去と床の修繕、壁の塗り直し等である。

各作品について、例えば、戸矢崎の発砲スチロールの設置方法、佐久間の塩の網を吊る方法や照明、大畑の黒板を用いての制作過程の展示、林のプロジェクターの設置などは、展示作品が元来の部屋がもつ個性とうまく馴染まなかったり、建物の老朽化や構造によって作品の取り付けが困難であったりした。この他にも実際に現場入りして作業を開始しないと分からないことが数多くあり必要に応じた対応が求められた。

3-3 戸矢崎満雄　作品『名も知らぬ遠き島より』

旧沙弥島小中学校の芸術祭用入口を入って最初に目にするのが、戸矢崎満雄の作品『名も知らぬ遠き島より』である。本作品は、沙弥島の浜に打ち寄せられた1000個ほどの発砲スチロールの漂流ゴミを学校の廊下の天井から吊りさげ、水面に浮かんでいる様子を表現したものである。発砲スチロールは荒波にもまれて角が丸くなったり、微量の海苔や微生物が付着して元来とは違った姿を露呈し、観客の想像力を掻き立てた。また、廊下の窓一面に海中と空をイメージしたブルーとオレンジのフィルムを装着し、校舎に新たな表情を加えた。

写真2　『名も知らぬ遠き島より』戸矢崎満雄

制作手順は、①発砲スチロールは坂出市役所協力のもと海岸のゴミ収集日を設け、収集、②窓にフィルムを装着、③発泡スチロールの選別、④テグスを設定した長さに切り、発泡スチロールにテグスを装着し、天井に設置したネットに順番に吊っていく作業である。ボランティアのこえび隊のメンバー延べ12名及び本学の大学院生2名の協力のもと作業を進めた。

写真3　画像は、9月1日の選別作業の様子。
収集作業協力：にぎわい室

写真4　展示作業の様子。

3-4　佐久間華　作品『塩の結晶 ー落ちた玉汗 砂が吸ふたー』

戸矢崎の発砲スチロールの断片を頭上に廊下を進むと、次に佐久間華の作品『塩の結晶 ー落ちた玉汗 砂が吸ふたー』の展示スペースがある。東側手前入口の暗幕を抜けて暗室スペースに入るとスポットライトに照らされた塩の結晶の網が目に入る。

このインスタレーションは、昭和初期に坂出で歌われた「塩田小唄(荒井情児作詞)」(1*)から着想を得てつくられた。この小唄は、塩田で働く男たちの労働の様子を歌ったもので、その歌詞を聞くと人の手による塩づくりがいかに大変な重労働であったが分かる。「落ちた玉汗 砂が吸ふた」はこの歌の一節であり、労働で流れた汗が塩田の砂に染み込む情景を情感豊かに歌い上げている。坂出を含む瀬戸内の海岸では、弥生・古墳時代の製塩土器が出土するなど古くから塩づくりが盛んであった(2*)。江戸時代後期には、香川県出身の久米栄左衛門が入浜式の塩田の基礎を築いた。私財を投じて塩田づくりに生涯を捧げた久米は、今なお地域の偉人として尊敬を集め、毎年春に行われる「さかいで塩祭り」にその名残をとどめている(3*)。

本作品の網の形状は、製塩と同じく瀬戸内の重要な産業であり、また同様に重労働を課する漁業の漁業網をイメージしてつくられた。佐久間と数名の学生らによって手編みされたこの網は、塩水に長時間浸し結晶化させた。

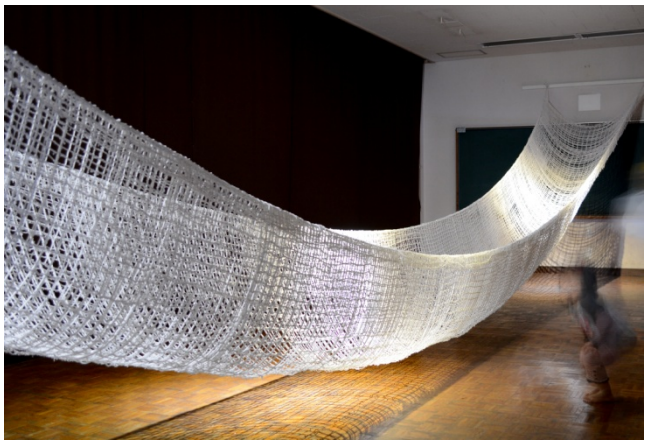

写真 5　『塩の結晶 ～落ちた玉汗 砂が吸ふた～』佐久間華 幅約 1.8m、全長約 10m

写真 6　作品細部　真っ白な塩の結晶の質感と床面にできた網目の陰影が視覚的効果を高めた。

参考写真 1　坂出の塩田風景　昭和初期（1930 年頃）入れ鍬作業。

坂出市ホームページ(4*)より転載。写真：大橋記念図書館

3-5　大畑幸恵　作品『カイソウ -shamijima-』

佐久間の展示スペースを出て、次の部屋へと移動すると大畑幸恵の絵画作品『カイソウ -shamijima-』がある。この縦 1820mm・横 4550mm の横長のパネルに描かれたモノトーン基調の風景画（写真 8）は、瀬戸内の海岸に打ち上げられた貝殻と流木を炭にしたものを砕いて作った絵具で描かれている。もともと油彩で制作していた大畑だが、ある時、出身地の瀬戸内の海辺にある貝殻の山を見ながら、この材料で絵具をつくって絵が描けそうだと確信し、その後、それを用いて抽象画や地元の風景を描くようになった。作品の印象を大きく左右する絵具の選択において、大畑は、あえて通常の絵具の条件を満たさない、しかし、独特のテクスチャーと存在感のある貝殻の絵具を用いることで、絵具の条件からそぎ落とされていくものの中に、絵画の可能性があるのではないかと考えた。

本作品を制作するにあたって、大畑は坂出市在住の親子ボランティアグループおてつ隊に呼びかけ、坂出周辺の海岸から貝殻を収集し、絵具をつくった。そして、展示スペースの窓に見える－坂出の街並みが海側に行くにつれて瀬戸大橋へと繋がっている景色（写真7、8）－を描いた。与えられた展示場所からわずかに見える瀬戸大橋を発想の引き金として、地域にある海辺の素材でその場の景色を描くことで、海とのつながりをより一層感じさせるものにした。また、教室の黒板に、道具や貝殻の粉末サンプルをいれた容器などを陳列し、貝殻の絵具のつくり方が理解できるようにした。また、地元海岸に生息する貝殻の名称なども分かるように貝の採集箱も設置した。

展示スペースには、この他に絵画を見るための台も備え付け、観客がその台に立って目線を調整すると、絵画の左端と窓の外の風景がピタリと合わせることができるという仕組みにした。芸術祭期間中には会場の観客から「繋がった！」と歓声が上がっていた。

写真7　『カイソウ -shamijima-』大畑幸恵

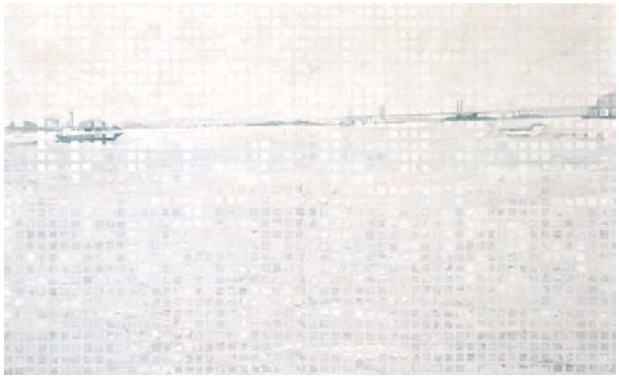

写真8　絵画作品　部分写真

写真9　絵画作品の反対側の壁には、貝殻の絵具のつくり方が記された黒板がある。

写真10　坂出市役所及び坂出親子おてつ隊のメンバーの協力のもと、沙弥島周辺海岸で貝殻の収集を行った。

「坂出親子おてつ隊」による貝殻拾い会

開催日：9月28日

開催場所：　綾川河口

参加者：坂出市在住の親子約70名、にぎわい室

3-6　林健太郎　作品『SHIRO』

大畑の展示スペース北西角の出口からいったん外へ出て、2部屋のみで構成された離れに移動し、そのまま奥へ進むと、本会場で見ることのできる最後の作品、林健太郎の映像インスタレーション『SHIRO』がある。展示スペースの中に入ると、児童用の机・椅子を並べて教室のセッティングを再現した壁面白一色の空間がある。その空間で、林は、プロジェクションマッピングの手法を用いて、沙弥島にちなんだコンピュータ・グラフィックス映像を壁面一面に展開させた。学校の教室の特色を生かし、児童用の机と椅子はそのまま観客席として使用した。実際の教室にあ

る黒板には、黒板の映像を、そして、壁には、時間割や壁時計の映像を投影し、現実の空間と映像とを巧みに交錯させた。

作品の構成は、キンコン、カンコンの授業開始を知らせるベルの音が鳴ると教室の明かりが自動的に消灯。次に、柿本人麿による「人間愛の尊さ」を詠んだ歌が桜吹雪と共に黒板に出現（写真 11）。後半は、前半の静けさから一変し（写真 12）、地元の特産である讃岐塩と瀬戸内の海の荒々しい映像へ切替わり（写真 13）、観客を不思議な空間へと誘う、となっている。場に臨場感をもたせる為に、実際に教室にあるカーテンの脇に揺れるカーテンの映像を投影し、教室に流れこむ風を表現するなど趣向を凝らした。芸術祭開催中には、大人も子供も児童用の椅子に座り、次々に変化する映像のライブ感を楽しむ姿が見受けられた。

写真 11-12　『SHIRO』林健太郎

ソフト:Autodesk Softimage / The Foundry Nuke / Adobe Photoshop/AfterEffects

技術：プロジェクションマッピング　長さ：3 分

写真 13　『SHIRO』林健太郎

3-7　旧沙弥小中学校の校庭内での展示について

旧沙弥小中学校会場については、展示作品に加えて建物の外観、校庭の使用に関しても本プロジェクトの一環と捉え、次の 3 案を実施した。①旧学校へのアクセスを改善するため、また、旧学校内の作品とナカンダ浜に設置にした『八人九脚』を繋ぐ動線を良くするために、建物側面にある従来の玄関を封鎖。ナカンダ浜側に面した建物正面のドアを芸術祭の出入口とし、そこから校庭ゲートまでスロープをつくることを坂出市に提案・実施。②校庭に彩りと休憩所を提供する為に藤本修三の椅子の作品 2 点を展示（写真 14-15）、③地元産業である鯉のぼりを本プロジェクトのイメージキャラクターにし、「三つの白」にちなんで白い鯉のぼりをデザインし校庭に設置（写真 16）。

写真 14-15　『LOVE』、『twin2013』藤本修三　旧沙弥小中学校校庭　休憩場所としても利用された。

写真 16　地元の鯉のぼり製作所から入手した白い鯉のぼり（柄が印刷されていないもの）の表面に、銀・ピンク・ブルーの銀箔を熱加工で貼りつけ、親子鯉が水しぶきを上げながら元気に泳ぐ姿を表現した。全長、父鯉 5m、母鯉 4m、子鯉 3m。デザイン・加工：真辺孝亮、兼田多鶴子（院生）

3-8　旧沙弥小中学校内においての喫茶「えのきカフェ」設置について

香川大学の協力のもと、旧沙弥小中学校会場内、芸術祭用入口入ってすぐにある旧音楽室内に「えのきカフェ」と呼ばれる喫茶室を設置した。地元の伝統食である餡餅雑煮と地元のみかんを絞ったホットみかんジュースを提供するなど、メニューの提案を含むカフェ営業は香川大学が行った。

本プロジェクトメンバーからは、①藤山哲朗がカフェスペースのデザイン、②大学院総合プロジェクトの一環で学生がスタッフ用エプロンのデザインを担当、③カフェの北側の壁には、大畑幸恵の貝殻ワークショップ（4-1）でつくった絵画作品の展示、④南側の壁には、会期中に行ったトークイベント（5-1）の関連資料として、齊木崇人の瀬戸内研究のパネルと関連図書を展示した。

芸術祭期間中、カフェスペースは鑑賞パスポートなしで利用できるようにした。

写真 17　埋め立てられる前の沙弥島の形をくり抜いたカフェのテーブル:藤山哲朗デザイン。

3-9　藤本修三　作品『八人九脚』

旧沙弥小中学校のすぐ目の前には、岡山県と香川県を繋ぐ瀬戸大橋の全貌を望むことができるナカンダ浜がある。この浜一帯は、縄文時代から古墳時代の遺跡や製塩遺跡があることでも知られている。この砂浜の中央、やや東寄りには、沙弥島のシンボル的な樹である一本の榎（エノキ）が根を張り、沙弥島の風景を情緒的なものにしている。

写真 18　ナカンダ浜の眺め

藤本修三作の『八人九脚』は、「橋・島・人びとを繋ぐ」をテーマに、8 脚の椅子を横方向に連結させ「横のつながり」を感じさせる意匠をもつ椅子の野外彫刻である。瀬戸大橋がよく見渡せること、そして、遊歩道への導入部であり人の行き来があるという点からナカンダ浜の中央、やや西寄りの海岸沿いに設置された。「瀬戸内海国立公園」の第 2 種特別地域及び「香川県指定史跡」に指定されているナカンダ浜では、杭の使用を禁じるなど作品設置に関し

て制限があり、ロケーションの選択にも注意が払われた。道行く人々が自由に座り、ひとやすみしながら瀬戸内海に浮かぶ周辺の島々や雄大な瀬戸大橋を眺めることができるようになっている。芸術祭期間中には、途切れることなく来場者や地元民が座り、瀬戸大橋を行き来するフェリーや貨物船を眺めたり、記念写真を撮影する姿が見られた。

写真 19　『八人九脚』藤本修三

写真 20　椅子の背面にある 7 色に彩色されたパーツで椅子を連結させている。

写真 21　野外設置に適した耐水性のある木材（ウエスタンレッドシダー）を使用し、耐水性シリコン塗料で塗装。

3-10 藤山哲朗＋冨井一級建築設計事務所　建築作品『西ノ浜海の家』

写真 22　『沙弥島西ノ浜の家』藤山哲朗＋冨井一級建築設計事務所　設置=坂出市

『沙弥島西ノ浜の家』は、「快水浴場百選」として環境省から選定されている西ノ浜（沙弥島海水浴場）の砂浜中央やや北側の陸地に建てられた。元々ここには、地域の自治会が海水浴シーズン時に運営する「海の家」があった。ちょうどその建替えを検討していたところ芸術祭参加が決まり、その一環として通年で活用する市営のコミュニティ施設として整備された [5*]。本敷地は瀬戸内海国立公園内に位置する為、形態制限、色彩規制等、景観内で突出しないための誘導基準が設けられている。そのため「家型」は必須である。建物の 3 つの部分（厨房棟、男子シャワー・トイレ棟、女子シャワー・トイレ棟）は、瀬戸内に浮かぶ 3 艘の船、3 軒の家、3 つに切断された山の複合的意味を意図したものである。このデザインの背景として、藤山は瀬戸内の風景の魅力は、純粋な自然というよりも人間の生活がつくりあげた文化と自然との調和と拮抗にあるとしている。一例として、瀬戸大橋を渡る車窓から見える、沙弥島の隣にある与島（小与島）の採石場の二条の切通しの人工的な断面が、ランドアートのようにも見えると述べている。

4.　ワークショップについて

芸術祭の準備期間及び開催期間中に、本学と地元の方々との交流を促し、芸術祭を盛り上げるという趣旨で地元市民を対象にしたイベント・ワークショップを坂出市役所と連携しながら計 5 回実施した。

4-1　ワークショップ　坂出の貝殻で絵をかこう　～坂出親子おてつ隊の芸術祭～

プログラムマスター：大畑幸恵

学生スタッフ：篠原聖慧、助野実奈、早川朋伸、木村愛、名嘉地知美、武藤萌

主催：瀬戸内国際芸術祭 2013

企画：沙弥島アートプロジェクト

協力：にぎわい室、坂出親子おてつ隊

参加者：坂出市在住の親子約 200 名

場所：沙弥島周辺の海岸（1 回目）、坂出市海の家（2 回目）、旧沙弥小中学校（3 回目）

ワークショップ構成　全 3 回

9 月 28 日　貝殻拾い　14:00～4：00

11 月 10 日　貝殻で絵具をつくろう

1 班目　10：00～12：00／2 班目　14：00～16：00

12 月 9 日　貝殻絵具で絵を描こう 10：00～15：00

2012 年 9 月～12 月中旬までの間に「坂出の貝殻で絵をかこう　～坂出親子おてつ隊の芸術祭～」と題した合計 3 回のワークショップを①「地域の素材を探す楽しみを味わう」②「拾った貝殻を砕いて絵具をつくる」③「つくった貝殻絵具で絵を描く」という 3 つの工程に分け、沙弥島の自然とアートの融合を体験できる場を提供した。ワークショップでは、最終的に参加者と大畑幸恵・本学学生らが共同で一枚の絵画作品を仕上げ、ワークショップの成果物として、芸術祭期間中、旧沙弥小中学校内えのきカフェに展示した。

写真 23-24　ワークショップでの作業の様子

本ワークショップでは、元気いっぱいの子供たちもしばし神妙な面持ちで作業に取り組んだ。貝殻を金槌で砕いた後、すり鉢で細かい粉末状にする作業（写真 23）や粉末状にした貝殻をさらにふるいにかけた後（写真 24）、つなぎの接着剤を混ぜて絵具を完成させた。

写真 25　ワークショップで制作した絵画

写真 26　絵画部分

完成した絵画（写真 25、26）は、遠近で見え方が変化するよう意匠がこらされている。写真 25 のように少し離れたところから見ると、ナカンダ浜の榎の青々と茂った樹のシルエットが見え、絵画の近くに寄ると、子供たちによって描かれた生命感溢れるモチーフ群が目に飛び込んでくる（写真 26）。

4-2　ワークショップ　ミニチュアのイスを作って芸術祭に参加しよう！

プログラムマスター：藤本修三

主催：香川県政策部文化振興課

協力：にぎわい室、坂出市商店街連合会

業務名：街なかワークショップ事業実施業務

参加者：坂出市内３中学校美術部員１１名

場所：坂出商店街内「オアシス元町」

ワークショップ構成　全２回

2013年２月17日（日）10:00～15:00　椅子の話（講義）と試作品づくり

2013年３月10日（日）10:00～15:00　組立・彩色

本ワークショップでは、地元の中学生11名を対象に、自由な発想で木工の技術や紙粘土を用いてミニチュアの椅子をつくった。ワークショップの構成としては、1回目に、①藤本による1時間程のトーク（藤本の椅子の作品解説及び1920年から2000年までの世界の椅子の名品について）、②各自アイデアを練り、試作品をつくる、2回目には、③木材を使用し、ノコギリ、カッターナイフ、テーブルソー、ドリルスタンド、ボンドなどを用いてミニチュアの椅子の部品を作成し、組み立てる、④水性ペンキを用いて彩色を行う、⑤作品のタイトルと用途、コメントが記入されたA3用紙の上に完成した作品を置くというものである。これらの作品11点は、芸術祭期間中に旧小中学校図書室に展示された（写真28）。

写真27　ワークショップの様子

写真28　旧沙弥小中学校図書室展示風景

5.　イベントについて

芸術祭の開催期間中、瀬戸内、特に沙弥島の自然・風土・人々の暮らしについてもっと身近に感じて欲しいという趣旨で一般来場者・地元市民を対象にしたトークイベントとウォーキングを行った。

5-1　トークイベント「瀬戸内の魅力と沙弥島」

日時：3月30日（土）13:00～14:30

場所：坂出市海の家および旧沙弥小中学校

発表者：齊木崇人（建築家・神戸芸術工科大学学長）「瀬戸内の再評価と、生活とコミュニティデザインについての提案」

ゲストトーク：髙尾義明（沙弥自治会長）「沙弥島の歴史」

作品解説：戸矢崎満雄（司会進行兼任）、藤本修三、藤山哲朗、佐久間華、林健太郎、大畑幸恵

主催：瀬戸内国際芸術祭2013

企画：沙弥島アートプロジェクト

協力：にぎわい室

参加者：一般来場者・地元市民など約60名

写真29　トークイベントの様子　坂出市海の家

本トークイベントでは、齊木崇人が長年に渡って行っている瀬戸内海のエコロジカル・デザインの研究について触れながら、「生活とコミュニティデザイン」「瀬戸内海のエコロジカル・ユニット」をキーワードに沙弥島の歴史や生活についての考察を述べた。本研究の紹介パネルは、旧沙弥小中学校のカフェに展示され一般に公開した。本トーク後には、沙弥島アートプロジェクト参加作家が自作の解説を行った。

写真 30　齊木崇人による瀬戸内研究パネルが展示された旧沙弥小中学校内カフェの様子

5-2　ウォーキングイベント「沙弥島ウォーキング　佐久間華と神戸芸術工科大学生の仲間たち」

日時：3 月 31 日（日）13:00～14:30

集合場所：旧沙弥小中学校校庭

進行役：佐久間華

解説：細川勝信（坂出市万葉を歩く会会長）

主催：瀬戸内国際芸術祭 2013

企画：沙弥島アートプロジェクト

協力：にぎわい室

参加者：一般芸術祭来場者・地元市民など約 25 名

参考資料：沙弥島アートマップ（6-2）

スケジュール

13:00　旧沙弥小中学校校庭集合

13:05～13:15　本プロジェクト概要説明　各作品紹介　スタンプラリー説明（佐久間華）

13:15～13:20　ウォーキングの諸注意　細川勝信（坂出市万葉を歩く会会長）紹介

13:20～14:25　沙弥島遊歩道散策　解説：細川勝信

14:25～14:30　西ノ浜海の家解説（藤山哲朗）

14:30　終わりの言葉

沙弥島には、万葉を代表する歌人である柿本人麻呂の歌碑や讃岐の五大師の一人である「理源大師」に因んだ御堂、それから、旧石器・縄文・弥生時代の遺跡や古代の製塩遺跡などの史跡を巡ることができる約 2 キロの遊歩道がある。島の自然と歴史に触れながら気軽にウォーキングを楽しむことができることもあって、行楽シーズンには多くの地元市民や観光客が訪れる。このウォーキングコースは、四国と本州を結ぶ瀬戸大橋を望めるナカンダ浜から、塩飽諸島を見渡せる半島北先端部分の長崎鼻を経由し、その後、半島西側部分にある白石古墳と城山の 2 つの丘を越えて西側に降りると細かな砂質と高い水質で知られる西ノ浜海水浴場に到着するというものである。本芸術祭の 3 会場（旧沙弥小中学校、ナカンダ浜、西ノ浜）もこのルート上にあるということから、本ウォーキングイベントを企画した。趣旨としては、解説付きで遊歩道を歩くことで沙弥島についてより多くのことを知ってもらい、本プロジェクトの作品をまた違った角度から見て頂く機会を提供するというものである。にぎわい室の協力のもと、沙弥島の歴史、自然、風土に詳しい「坂出市万葉を歩く会」（香川県在住の歴史文学ファンによって運営されているサークル）の会長、細川勝信氏に解説をお願いした。本学大学院生がデザインした沙弥島アートマップを片手に、参加者達と共に 1 時間程かけてゆっくりと遊歩道を歩いた。

写真 31-32　ウォーキングの様子

5-2-1 沙弥島ウォーキング限定スタンプラリー

大学院総合プロジェクト（7）の一環で芸術祭を盛り上げるグッズの企画・作成を行った。本スタンプラリーに使用したスタンプのデザインもそのひとつである。本学大学院芸術工学研究科院生（以下、院生）の竹内洋佑は、本プロジェクトのイメージキャラクターである鯉のぼりをモチーフにして、父鯉、母鯉、子鯉、幟のスタンプ計 4 点をデザインした。ウォーキングのルート 4 カ所にスタンプラリーデスクを設けた。

写真 33　スタンプ企画デザイン：竹内洋佑（院生）

6.　大学院総合プロジェクトについて

大学院の選択科目のひとつである大学院総合プロジェクトでは、複数の学生と教員でチームを編成し、学外フィールドワーク、見学調査、または特定プロジェクトへの参加などを積極的に行う授業を実施している。通年の授業では、学外での活動を通じて地域社会について学び、また、現代社会におけるアートやデザインの需要を把握し、そこで得た経験を制作やプレゼンテーションにまとめ発表するということを行っている。本プロジェクトでは、本芸術祭参加をひとつの学びの場と捉え、戸矢崎満雄、藤山哲朗、佐久間華の 3 名が担当教員となり、大学院総合プロジェクト「沙弥島アートプロジェクト」を開講することとなった。本科目の履修生は、7 名であり、それぞれの専門分野をふまえて作業分担を行い、芸術祭を盛り上げる目的で、印刷物・マップ・グッズの企画・制作を行った。

6-1　ポスター制作

芸術祭開催にあたって本プロジェクトのプロモーション用にポスターとちらしを作成した。ポスターとチラシ表紙には、院生の古賀宏美が描いたイラストレーションを起用した。古賀は、現地調査の際に感じた、「初めて目にした沙弥島ののどかな雰囲気」というものをひとつのコンセプトにして、沙弥島の沖合にみえる景色や海の波の動きを大胆な筆のタッチで表現した。デザインは、院生の田原知世が担当した。古賀宏美の描いた横のラインを強調した波の動きとは対照的に、あえてフォントを細く、縦長のものを採用したという。そうすることで、縦のラインを強調させ、純朴なイラストレーションに小気味良い緊張感を加えた。また、イラストレーションの周囲に白の余白を意図的につくることによって、絵の額縁の機能を与え、古賀宏美のイラストレーションがポスターデザインではなく絵画であることを示唆した。

図 5　イラストレーション：古賀宏美（院生）

デザイン：田原知世（院生）

ポスターサイズ：B1　光沢紙　印刷部数：500 枚

このデザインは、会場のバナーのデザインとしても使用し、旧沙弥小中学校の芸術祭出入口付近外壁に設置した。また、A4 チラシの片面にも使用した。

6-2　沙弥島アートマップ

坂出市より依頼を受け、芸術祭用に沙弥島周辺の日本語・英語の 2 か国語表記のマップ『沙弥島アートマップ』を作成した。本マップは、芸術祭用シャトルバス停留所・インフォメーションセンター、近隣の観光名所である瀬戸

大橋記念館と瀬戸大橋タワー、芸術祭会場など芸術祭の来場者に必要なエリアを網羅している。また、本州から瀬戸大橋を経由、及び、香川県の高松駅と丸亀駅からのアクセスマップも併記した。ブルーを基調としたマップ面にオレンジの差し色のラインで付近のバス停留所から芸術祭会場までの歩行ルートとその所要時間を表記し、裏面には、シャトルバス時間や名所・史跡の概略などを表記した。

図 6-7　A3 二つ折り

マップ制作：瀬戸内国際芸術祭　坂出市実行委員会

企画デザイン：松木敬太郎（院生）

マップサイズ：A3　セミ光沢紙

6-3　スタッフ用ジャンパー

旧沙弥小中学校内で働くボランティアのこえび隊メンバー及びスタッフが着用するパーカーの企画デザイン・制作を行った。作業や接客の際に動きやすいように、また、肌寒い時期であることから、気密性の高いポリエステル素材のジャンパーを採用し、ジャンパー背面には、古賀宏美の船のイラストを熱転写した。「三つの白」をイメージしてジャンパーの色は白とした。

写真 34　イラスト：古賀宏美（院生）　企画・デザイン：真辺孝亮（院生）協力：白本恵美（本学ファッションデザイン学科実習助手）

6-4　カフェ用エプロン

旧沙弥小中学校内に設置された「えのきカフェ」の香川大学学生スタッフ用のエプロンに使用する「えのきカフェ」イラストと文字の企画デザイン・制作を行った。エプロンは清潔感のあるアイボリーホワイトで綿素材のものを選び、胸の部分には、古賀宏美デザインのナカンダ浜に生息するエノキのイラストをシルクスクリーンプリントした。

写真 35　イラスト：古賀宏美（院生）　企画・デザイン：真辺孝亮（院生）　協力：白本恵美（実習助手）

7. まとめ

春の部限定で開催されたことやアクセスの良さもあって沙弥島会場には、予想を遥かに超えた 77,693 人が訪れた。本プロジェクトのメイン会場である旧沙弥小中学校でも、28,195 人もの来場者があった。地元の自然・風土にこだわったテーマ設定を行ったことで、一般来場者はもとより地元市民からの賛同を得て、芸術祭期間中に何度も会場に足を運び作品を鑑賞した市民もいたという。芸術祭期間中のイベントを通じて、来場者と交流する機会にも恵まれ、本プロジェクトへの関心や芸術祭の熱気を肌で感じることができた。

本稿は、2013 年 7 月下旬に執筆されたものである。つまり、瀬戸内国際芸術祭 2013 春の部で行われた本プロジェクトは終了しているが、芸術祭の夏の部が現在進行形で開催されている状況でまとめられたものであるということをここに記しておきたい。芸術祭が継続している中で、本プロジェクトを振り返りその成果を述べることは容易ではないが、記憶が新しいうちに本稿をまとめてその成果や課題に気づくことで、引き続き行う大学院総合プロジェクト「沙弥島アートプロジェクト」で再考と改善を試みたいと考え、本稿を執筆することとした。

本稿の目的は、沙弥島アートプロジェクトで行った全ての活動について報告することである。駆け足ではあるが、成果物の画像と共にその内容を述べた。本プロジェクトの主な成果は、国際的で大規模な芸術祭において「三つの白」という瀬戸内の地域の特色を生かしたテーマ設定を行い、①本学教員 6 名による参加作品・建築作品の公開、②関連イベント、③大学院プロジェクト学生らによる印刷物・グッズ企画・制作を総合的に形作り、それを実践したことである。課題としては、①芸術祭の性質上、物事が同時進行し、また流動的である為、時間的余裕をもって計画・準備をすることが困難であった、②地理的な理由により現地へのアクセスが制限されているが挙げられる。引き続き行う大学院プロジェクト「沙弥島アートプロジェクト」では、これらの点について検討し、改善策を見つけ、現地と連携しながら、具体的な提案を行っていきたい。

謝辞

本プロジェクトは、瀬戸内国際芸術祭坂出市実行委員会、坂出市産業課にぎわい室、坂出親子おてつ隊、香川県政策部文化振興課、坂出市商店街連合会、街なかワークショップ事業担当者、エプソン販売株式会社（プロジェクターレンタル協力）髙尾義明（沙弥自治会長）、細川勝信（坂出市万葉を歩く会会長）、こえび隊メンバーを始め、地元の方々を含む多くの方々ご理解とご支援によって遂行することができた。ここに記して謝意を表す。

【参加学生等】

大学院生：兼田多鶴子、北岡元太、古賀宏美、竹内洋佑、田原知世、松木敬太郎、真辺孝亮、森水智

学部生：秋田さゆり、阿部祥子、飯沼一磨、一月拓志、岩崎理香、占部彩加、小川明洋、沖山ひかり、木村愛、古賀喬行、近藤ゆかり、坂本健、篠原聖慧、助野実奈、谷口智美、名嘉地知美、早川朋伸、松下真子、南里奈、宮城有加、武藤萌、村木寛人、望月玲実、山元太陽

博士学生：ミーミー

木下玲子

【脚注】

1* 1930 年に作られた讃岐新民謡。荒井情児作詩・佐々紅華作曲

2* 坂出市公式ホームページ『坂出市紹介　古のロマンのまちさかいで　沙弥島』 http://www.city.sakaide.lg.jp/soshiki/nigiwai/syamijima.html （最終アクセス日 2013 年 7 月 31 日）

3* 坂出市公式ホームページ『まつり　第 22 回坂出鹽（しお）まつり』 http://www.city.sakaide.lg.jp/soshiki/nigiwai/sakaidesiomaturi.html（最終アクセス日 2013 年 7 月 31 日）

4* 坂出市公式ホームページ『今昔写真集（昭和 29 年まで）』 http://www.city.sakaide.lg.jp/soshiki/tosyokan/lib-eizou-syowa1.html （最終アクセス日 2013 年 7 月 31 日）

5* 芸術祭期間中には、食とアートの融合を試みるアーティスト、EAT & TARO の『島スープ』や地元市民らが地元の食材を用いてこしらえた沙弥定食弁当などがここで販売された。西ノ浜には、この他、五十嵐靖晃の『そらあみ』という地元の島人らの手によって編まれた巨大漁業網の野外作品も展示された。

【参考文献】
美術手帖編集部『瀬戸内国際芸術祭 2013 公式ガイドブック アートをめぐる旅 完全版 春』3 月号増刊、美術手帖、2013 年
北川フラム（監修）『瀬戸内国際芸術祭 2010 作品記録集』美術出版社、2011 年
神戸芸術工科大学大学院（編集）『瀬戸内国際芸術祭参加沙弥島プロジェクト』、「大学院芸術工学研究科報告集総合プロジェクト 2012」、2013 年

【執筆者】
本稿は、各担当者へのヒアリング・提出書類の閲覧を行い、佐久間華が全項を執筆した。